コミュニケーション能力養成の先要条件
—中学校の英語教育に関するアンケートの調査結果を添えて—

Some Prerequisites to Fostering Communicative Competence
—Along with the Results of a Questionnaire on English Education at Junior High Schools—

笹谷　孝　　竹野　茂　　矢野町子

はじめに

本学は平成5年4月に開学し、翌年の平成6年4月に教職課程を設置した。大学の完成年度に当たる本(平成8)年度末には、教職に関する専門科目の単位を修得した者には、卒業と同時に、「中学校教諭・高等学校教諭一種免許状（英語)」が授与され、英語教師の卵が誕生することになる。そして、本学卒業の一期生のうち何人かが、来年度から中学や高校の教壇に立って、英語を教えることが期待されている。

いわゆる「巷の英語」と異なり、中学・高校での英語は「英語科教育」の一環として教えられる。言うまでもなく、英語科教育は、文部省の定める学習指導要領と教育基本法の規制を受けている。『中学校学習指導要領』第9節「外国語」で、その＜目標＞は「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。」と規定されている。高等学校の＜目標＞は「・・・、外国語で表現する能力を養い、・・・、国際理解を深める。」と語句の使い方に多少の違いはあるが、主旨は大体同じである。英語科教育の目的は、この＜目標＞の元に定められた「英語」科の各学年の目標を達成しつつ、また他の諸教科とも協力しながら、究極的には教育基本法第1条に規定された「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として・・・」という＜教育の目的＞を達成することにある。

本学では英語関係科目群の授業科目として13科目20単位を必修としているが、その内、特にコミュニケーション能力養成を目指す「LLⅠ」「LLⅡ」「LLⅢ」の担当者として英語科教育の理念の一端を述べ、併せて、平成7年末に実施した中学校の英語教育に関するアンケートの調査結果を発表することにより、更に認識を新たにしたいと思う次第である。

1．広い視野に立っての展望

科学技術の進歩とコンピュータ導入による多方面での多様化・細分化・専門化は止まるところを知らない。それから受ける恩恵は計り知れない。然し、「木を見て森を見失う」とか「角を矯めて牛を殺す」という例えを想起させる歪も少なくない。この傾向は、人の命に係る医学において顕著である。『脳内革命』の著者春山氏は、この本の冒頭で、「病人が行くところ」という病院の常識を覆えし、「未病」の人を病気にさせないで帰してあげるのが病院の使命であるべきだとし、「病気にさせないのが本当の医学」だと述べている。ところが、医療ミス、薬害問題などは論外としても、先端技術の完備した病院で、高度の治療と高価な薬で怪我や病気は治ったが、命は助からなかったという悲劇がある。教育界においても、これに似た悲劇が繰り返されていないだろうか。元来、自然に伸び伸び発育する筈の健全で若い命を、よりよく生かし育てるのが教育の本質であるのに、狂い育てては許され難い大罪を犯していることになる。

車の運転を教えるのでも、実技だけでなく構造・法規等にも精通していなければならない。発育盛りの生きた人間に、生きたことばとしての外国語を教えるのであれば、人間学（anthropology)、言語学(linguistics）の他にも、いろいろな分野の心理学（psychology)、哲学（philosophy)、教育学(pedagogy）等を守備範囲とした学際的な（interdisciplinary）研修に基づく広い視野に立っての教育実践が要求されることになる。「全体というものはその構成要素の総和を越えた存在である」とするホーリズム(holism）の概念に基づき、患者のすべての状態を把握して治療するホーリスティック(holistic）な医学が見直されつつあるが、教育の場に於いてもホーリスティックな実践の見直しが求められる所以である。

2．ことばの習得と学習

ことばは、母語・第二言語・外国語を問わず、本来、他人から教え込まれて学ぶ（learn する）ものではなく、自分で習得（acquire）するものである。この認識に立つならば、外国語の教授法・指導法は外国語の習得法の裏打ちでなければならない。

Krashen（1982）は、実験と観察によって、第二言語習得と学習について5つの仮説をたてた。その内の1つで、5つの仮説の中心的な役割を果たすThe Acquisition-Learning Hypothesis（習得と学習の仮説）によると、成人が第二言語の能力をつける方法にはacquisition（習得）とlearning（学習）がある。acquisition は、実際にコミュニケーションの手段として言語を使うことによってcompetence（言語能力）を養う方法である。これは、子供が母語を習得するときと同じ"natural" way（「自然な」方法）による subconscious process（無意識な過程）である。一方、learning は conscious（意識的）な過程で、"knowing about" language（言語「について知ること」）、つまり、言語の "formal knowledge"（「形式的知識」）を得ることである。更に、第3の The Monitor Hypothesis（モニターの仮説）でKrashenは、意識的な学習はsecond language performance（第二言語の運用）においてモニター（自分自身の言語使用を監視すること）の機能しか果たせないと仮定する。

子供は、教えられなくても、日頃のコミュニケーション活動を通して、自分で文法ルールを発見する力をもっている。そして、発見したそのルールを自由奔放に使い、その試行過程で修正と定着を図りながら更に次のルール発見・修正・定着のサイクルをスパイラルに繰り返す。これがことばの習得の原動力である。外国語の習得に関しても基本は同じである。しかし、日本の従来の英語教育は、授業時間数の関係もあって、生徒に発見させたり、解決させることを省き、教師がルールを教えてしまい、生徒はそれを覚えることで事足りるとする傾向があった。文法ルールの意識的学習は、ことばの習得、即ちコミュニケーション能力の獲得とは次元を異にする作業である。文法ルールを自分の力で発見させ、それをコミュニケーションの道具として活用するための力を養うための言語活動の場を如何に確保し有効に設定するかが外国語教育にたずさわる教師の最大の役割であろう。

3．コミュニケーションの語源

ことばの習得に関して最も大切なことは、コミュニケーション能力の養成である。ここで、何気なく使っている「コミュニケーション」という言葉の戸籍調べをしておくことも必要であるように思われる。
英語の "communicate"、"communication" の語源はラテン語であるが、英語としての最も古い記録は、OEDによると、思いの外新しく、
communicateについては
1. To give to another as a partaker; to give a share of; to impart, confer transmit (something intangible or abstract, as light, heat, motion, a quality, feeling, etc.).

1538 STARKEY *England* I.i.21 God,that .. communycatyth hys gudnes to al other.

2. To impart (information,knowledge,or the like); to impart or convey the knowledge of, inform a person of, tell.

1529 WOLSEY in Ellis *Orig.Lett*. I .102 II .2, I wold nut onely commynycat thyngs unto you, wherin, etc.

とあり、
communicationについては
1. The action of communicating or imparting.の項で

1382 Glorifiynge God .. in symplenesse of comynyunicacioun into hem and into alle. の例が、

2. The imparting, conveying, or exchange of ideas, knowledge, information, etc. (whether by speech, writing, or signs).の項では

1690 To make Words serviceable to the end of Communication.の例があげてある。

英語からの借用語として日本語の中に入ってきた「コミュニケーション」という言葉は、荒川惣兵衛著

『角川外来語辞典』(角川書店) によると、先ず、「マス コミュニケーション」(『ユネスコ憲章』1946.11) として紹介され、次いで「マス コミュニケーション」の略としての「マス コミ」(『改造』1954.8.11／『知性』1954.12) を経て「コミュニケーション」(寿岳・林他訳『コミュニケーションの歴史』1958) に至っている。複合意識の薄れてしまった「マス コミ」ないし「マス コミュニケーション」から「コミュニケーション」が独立し、独り歩き出来るようになるまでに、かなりの年月を要したことになる。しかし、今やこの語は、時代の寵児であり、高等学校の科目の名前まで獲得するに至っている。

4．コミュニケーション能力

「コミュニケーション能力」という言葉は、英語の 'communicative competence' に由来すると思われる。 communicative competence の定義付けはいろいろなされているが、Canale (1983) によるものが一般的である。それによると Communicative Competence は
1. Grammatical Competence 2. Sociolinguistic Competence 3. Discourse Competence 4. Strategic Competence の4つの Components (構成要素) から成ると考えられる。これらを簡単に解説すると、1. は pronunciation, vocabulary, grammar などの言語コードについての「文法能力」 2. は the ability to use language appropriately in different contexts 即ち、いろいろな文脈、前後関係、周辺状況の中でことばを操って社会文化的に適切な言語使用ができる「社会言語学的能力」 3. は the ability to use grammatical competence to make cohesive and coherent texts 即ち、文法能力を用いて 話の筋道をつけ、一貫性のある談話を可能にすることのできる「談話能力」 4. は the ability to compensate for difficulties and make the use of language effective 即ち、むずかしい状況の中でもコミュニケーションの効果を高めたり、不十分な言語知識を補うためにうまくことばを使いこなす「方略能力」ということになるだろう。

意思の疎通を図るには、文法的に間違いのないことばをしゃべるだけでは不十分である。それは必要条件ではあるが、十分条件とはなり得ない。場面と状況をしっかり把握した上で、社会文化的に受け入れられる内容について、それにふさわしい話し方をしなければならない。また支離滅裂な話し方ではコミュニケーションは成立しない。首尾一貫した内容について、それなりに工夫をこらした話し方によってコミュニケーションは成り立ち、広がり、深まるということである。

ところで、前述の Krashen は、 Tracy D. Terrell が経験と観察から編み出した指導法を理論的に裏付けして、1983年に、二人で*The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom* を出した。この著書は多くの語学教師の共感を呼び、われわれも多くの示唆を受けたところである。The Natural Approach は言語を意味とメッセージを伝える手段、つまり、コミュニケーションの道具であると考え、言語に関する理論よりも言語習得に関する理論を理論構造の中心に置いているが、Canale の定義は、この言語観と矛盾しないように思われる。

コミュニケーションの道具としての言語を習得する過程でのコミュニケーション能力の養成は、ブローカ中枢やウェルニッケ中枢などの言語中枢のある左脳だけを短絡に口先に結び付け、心にもないことを流暢にしゃべることばの操り方の養成ではなく、心と右脳を源として「ほとばしる」ことばの運用力の養成であるのは言うまでもない。

5．ことばの習得を目指してのプロセス

学習と習得の相違については既に述べた通りであるが、学習と習得は路線が違い、途中で乗り換えが困難であるとすれば、最初から習得の線路に乗る必要がある。そして、第一歩からそれぞれの段階での習得を目指すのが得策である。従来は、読んで訳して終わりというような英語の授業も少なくなかった。理解を助けたり確かめるのには母語である日本語を利用・活用するのは悪いことではないし、時にはそれが有効であり、必要でもある。しかし日本語での理解が終点では、英語についての日本語での学習にはなっても、英語という「ことば」の習得からは程遠い。ことばの習得を目指す教室では、分かった内容について英語での言語活動を十分行わなければならない。しっかりした理解と目的意識に基づき、コミュニケーショ

ンにつながる言語活動に結びつく meaningful drill を積み重ね、入門期のできるだけ早い段階から、真性コミュニケーションにつながる疑似コミュニケーションの場を設定し、それを如何に有効に活用するかがコミュニケーション能力養成の鍵と言える。

できるだけ早い段階での習得では、一つ一つの単語、一つ一つの文の単位で出発して積み重ねといくのではなく、situation（場面）の中でそれぞれの語(句)・文を相補的に生かし、それぞれの文の中で個々の語(句）を相補的に機能させる工夫が必要であるように思われる。

人間が物事を理解するときの頭の中の過程を研究する認知心理学(cognitive psychology)では、何かを理解するときには、まず大ざっぱに全体を把握しその後で細かい部分を捕えてより一層精密に理解するのであって、始めから個々の部分を認知してそれを組み合わせて全体の理解をするのではないという立場をとる。頭の中では、多分、まず右の脳で想像的な思考や空間的な認知が先行し、その後で、左の脳で分析的あるいは論理的に検証したり、右脳で直感的・瞬間的に構築したスキーマの再構築をしているのではないだろうか。

日本の英語教育においては、ＡＢＣから始めて、単語から句・節・文・章へというように、とかく、小さい単位から大きな単位へと理解を広め・深めるプロセス中心のボトムアップ処理(Bottom-up processing）の授業展開に偏しがちだった。その学習法・指導法の効果を否定はしないが、それと対照的なトップダウン処理(Top-down processing）も有効に取り入れ、バランスのとれた習得法・教授法の確立が望まれる。特に、最近の言語習得理論で重要視されているインプット(input）に関しては、学習者が耳や目から「理解可能なインプット」を浴びる程に取り入れる必要がある。コミュニケーション、特にオーラル・コミュニケーション能力養成のためには、可能な限り豊富に インプットを取り入れると共に、興味・価値観・信念・意見・態度・動機・背景的知識などと幅広く関連づける 'Result-based' processing に基づく授業展開が望まれる。

6．ことばの習得の順序

10歳ぐらいまでの子供は、適当な言語環境に入れられると、そのことばを自然に習得する。しかし、10歳を過ぎると、新しいことばの習得能力は急速に低下する。言語習得・獲得の臨界期に関して、Neurolinguistics（神経言語学）では 一般に思春期前期をcritical ageと考え、Lenneberg（1967）は３歳ごろから１０代初期までを critical period とした。言語習得・獲得の臨界期については諸説があり、それぞれ批判も受けているが、いずれにしても、いわゆる臨界期を過ぎてから外国語としての英語を習い始める日本の中学校では、習得につながる英語教育の道は平坦でないことは確かである。それだけに、配慮しなければならないことは多いが、とりわけ習得順序を考慮した教科書の編集が望まれる。

Roger Brown（1973）は、第一言語の14の morphemes（形態素）について、子供がどんな順序でどのように習得するかを研究し、貴重な発見をした。彼の発見は、第一言語の習得に関する研究だけでなく、第二言語の学習に関する研究にも大きな影響を与えてきた。Brown の研究は、その後、多くの研究者によって、研究方法や被験者の種類・タイプを変えながら追研究が重ねられた結果、概ね間違いないことが検証されている。

いろいろな角度から検討した上での William Littlewood（1984）の結論 によると、
＊これらの morphemes（形態素）を習得する順序は、学習者の mother tongue（母語）とは関係なく、first language（第一言語）からの transfer（転移）または interference（干渉）はさほど影響しない。その順序は "not only natural, but also universal"（「自然で道理にかなった、且つ、いかなることばにも当てはまる普遍的」）なものである。＊第二言語の学習者は、年齢や母語に大して影響されることなく、やはり、この順序で morphemes を習得していく。＊この順序は、学習者が子供であっても大人であっても、また、学習者の母語にかかわりなく、そして、学習者がそのことばを既にある程度教わった後であっても変わることはないということである。

現在、宮崎県の中学校で使用されている英語の教科書は、開隆堂の *Sunshine English Course 1, 2, 3* と東京書籍の *New Horizon English Course 1, 2, 3*である。これらの教科書が上述の14の morphemes

をどこで学習するかを Brown のリストに添え書きして表にすると、次のようになる。

		Sunshine			New Horizon		
1	present progressive *-ing* (as in *she is running*)	1/11	57		1/10	72	
2	preposition *on*	1/12	74	1/4 22, 1/11 59	2/4	21	1/8 60, 1/10 72
3	preposition *in*	1/3	15		2/3	12	1/2 16, 1/4 28, 1/9 6
4	plural *-s* (as in *two books*)	1/4	22		1/6	42	1/4 30
5	irregular past forms (as in *she went*)	1/13	77	go 1/4 22, came 2/5 27	2/2	10	go 1/9 68 came 1/LR 96
6	possessive *'s* (as in *daddy's hat*)	1/7	40		1/2	18	
7	uncontractible copula (e.g. *is* in *yes, she is*)	1/2	9		1/2	17	
8	articles *the* and *a* (which were classified together)	1/2	8		1/3	20	
9	regular past *-ed* (as in *she walked*)	1/12	71		1/11	84	
10	regular third-person-singular *-s* (as in *she runs*)	1/8	45		1/8	56	
11	irregular third-person-singular forms (e.g. *she has*)	1/8	45		1/11	88	
12	uncontractible auxiliary *be* (as in *she was coming*)	1/11	57		1/10	72	
13	contractible copula (as in *she's tired*)	1/2	10		1/2	18	
14	contractible auxiliary *be* (as in *he's coming*)	1/11	57		1/10	74	

㈱1の欄の1/11 57は*Sunshine English Course 1* のProgram 11(p.57)で，
1/10 72は*New Horizon English Course 1*のLesson 10(p.72)で学習することを示す。以下同様。
5の欄のgo1/4 22は，wentの現在形'go'は*Sunshine English Course 1*のProgram 4(p.22)で，wentの反対語の'came'は*Sunshine English Course 2*のProgram 5(p.27)で学習することを示す。
1/LR 96は*New Horizon English Course 1*のLet's Read (p. 96)を示す。

おわりに

外国語（英語）教育において、「コミュニケーション」がもてはやされ、一人歩きしている感がある。考えてみれば不条理な話である。コミュニケーションの手段の一つとしてことばがあり、ことばの中に母語があり、外国語がある。英語もその内の一つに過ぎない。ことばは、母語・第二言語・外国語を問わずコミュニケーションの大枠の中にあるのであって、ことばの枠内に「コミュニケーション」をはめ込むのはそもそも無理である。

平成5年4月1日から施行の現行中学校学習指導要領と平成6年度から学年進行をもって実施中の高等学校学習指導要領のもとで、中・高の英語教育の現場では「コミュニケーション」にどう対処すべきかの苦労が続いている。中学校では、英語教育の枠の中に「コミュニケーション」を閉じ込めてどう料理するか迷っている様子が見え隠れする。高校では、外国語科に属する英語に関する科目に「英語I」「英語II」「リーディング」「ライティング」「オーラル・コミュニケーションA」「オーラル・コミュニケーションB」

「オーラル・コミュニケーションC」が設置された。これでは、英語を使っての言語活動は全てコミュニケーション活動であることの認識が薄れてしまう心配がある。

大きな転機を迎える中で、日本の外国語教育、とりわけ入門期の英語教育を担う中学校の役割は極めて大きい。筆者たちは、今後も継続して研究を続ける手始めとして、先ず宮崎県の中学校の英語教育の実態を知るためにアンケート調査を行ったのでその集計結果を付記する。

＜参考文献＞

Brown, R. 1973. *A First Language: The Early Stages*. Harmondsworth: Penguin Books.

Canale, M. 1983. 'From communicative competence to communicative language pedagogy.' In J. Richards and R. Schumidt(eds.) *Language and Communication*. London: Longman.

Krashen, S.D. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Pergamon.

_____ and Terrell T.D. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Pergamon／Alemany.

Littlewood, W.T. 1984. *Foreign and Second Language Learning*. Cambridge University Press.

羽鳥博愛　1996　『国際化の中の英語教育』　三省堂

春山茂雄　1995　『脳内革命』　サンマーク出版

田崎清忠（編）1995　『現代英語教授法総覧』　大修館書店

平成７年１０月２日付で宮崎県下の国・公・私立の全中学校１５２校の英語科主任宛に文書（資料１.『英語科主任殿』）を発送した。同封物は各中学校の英語科教員数分のアンケート用紙と回答依頼書（資料２.『英語担当の先生へ』）であった。

中学校の現場の多忙さを反映してか、回収率は非常に低かったが、忙殺されている中で返送していただいた回答はいずれも極めて真摯で、困難な状況の中で先生方が献身的に教育活動に従事されていることが偲ばれ、頭の下がる思いであった。以下の集計結果は、平成８年２月２２日付けの文書（資料３.『アンケートの集計結果について（報告）』）で各中学校の英語科主任宛に発送した。

なお、このアンケート調査は、宮崎学術振興財団の平成７年度の助成による研究『英語のオーラル・コミュニケーション能力の養成と教材の開発』の一環として行ったものである。

平成７年１１月実施アンケート（宮崎県下の中学校英語教諭対象）の集計結果

回答数：６３名

性　別：男　３０名（47.6%）（小数点以下２位四捨五入；以下同じ）
　　女　３３名（52.4%）

英語教職歴：	1）５年未満	２０名（31.7%）
	2）５年～１０年	１５名（23.8%）
	3）１０年～１５年	１２名（19.0%）
	4）１５年～２０年	１名（ 1.6%）
	5）２０年～３０年	９名（14.3%）
	6）３０年以上	６名（ 9.5%）
英語担当学年（複数回答可）：	1）１年生	３１名（49.2%）
	2）２年生	３９名（61.9%）
	3）３年生	４０名（63.5%）
英語担当生徒数：	1）５９人以下	１０名（15.9%）
	2）６０人～９９人	５名（ 7.9%）
	3）１００人～１３９人	１８名（28.6%）
	4）１４０人～１９９人	２５名（39.7%）
	5）２００人以上	５名（ 7.9%）
勤務校の区分：	1）公立	６０名（95.2%）
	2）国立	３名（ 4.8%）
	3）私立	０名（ 0.0%）
受けたことのある英語の試験（複数回答可）：	1）英検	４８名（76.2%）
	2）ＴＯＥＦＬ	１４名（22.2%）
	3）ＴＯＥＩＣ	１名（ 1.6%）
	4）その他	１名（ 1.6%）
	（通訳試験　１名）	

問1　国際化時代の人材養成に中学校の授業時間数は十分だとお考えですか？

1. 十分である	13名(20.6%)
2. 十分とはいえない	45名(71.4%)
3. 大幅に足りない	5名(7.9%)

＊「十分である」とするものが少なく、約8割が不十分と考えている。
ちなみに、全国のデーターでは、「十分である 28.3%」、「十分とはいえない 63.0%」、「大幅に足りない 7.3%」となっている。

問1-1　「十分である」と答えた方にお願いします。その理由をお書きください。

1. 他教科とのバランスで	6件(9.5%)
2. 増やせば負担増（生徒・教師）となる	3件(4.8%)
3. 適当だから	3件(4.8%)

＊全国の場合は、上記の他に、「時間数よりも内容が問題だから」、「今のままでゆとりがあるから」などの理由が上位を占めている。

問1-2　「十分とはいえない」、「大幅に足りない」と答えた方にお願いします。その理由をお書きください。

1. コミュニケーションのための時間がとれない	22件(34.9%)
2. 教科書をやるのが精一杯	10件(15.9%)
3. 英語に接する時間が不十分	9件(14.3%)
4. 行事・出張などで授業時間が減るから	5件(7.9%)
5. 受験対策がどうしても必要だから	4件(6.3%)
6. 文化的な面での教育ができないから	2件(3.2%)
7. ドリル不足になるから	1件(1.6%)

＊「不十分である」と答えた理由は上記の通りであるが、全国の場合は「会話などコミュニケーションのための時間がとれないから」、「英語は毎日やるのが大切だから」、「現状は教科書をこなすのが精一杯だから」、「行事などで授業時間が減るから」、「受験対策がどうしても必要だから」等の順序で上位を占めている。

問2　現在の中学生の英語力で強い面は次のどれですか？（複数回答可）

1. 単語・熟語（語い）	25件(39.7%)
2. 文法	26件(41.3%)
3. リスニング	28件(44.4%)
4. スピーキング	2件(3.2%)
5. 解釈	14件(22.2%)
6. 英作文	1件(1.6%)
7. その他	2件(3.2%)
（ＡＬＴのゲームへの反応	1件
どれも同じ程度	1件）

＊本県の場合は上記の通りであるが、全国でも「リスニング 44.2%」、「文法 22.4%」、「単語・熟語 22.3%」、「解釈 20.6%」、「スピーキング 11.6%」、「英作文 1.0%」と順序は変わりない。

問3　現在の中学生の英語力で弱い面は次のどれですか？（複数回答可）

1. 単語・熟語（語い）	13件(20.6%)
2. 文法	6件(9.5%)

3. リスニング	19件(30.2%)
4. スピーキング	52件(82.5%)
5. 解釈	8件(12.7%)
6. 英作文	43件(68.3%)
7. その他	3件(4.8%)
(表現力	1件
考える力（日本語の力）	1件
積極的にコミュニケーションをはかろうとする態度	1件)

＊前問の「強い面」の裏返しであるが、全国では「スピーキング 58.0%」、「英作文 57.6%」、「単語・熟語 23.6%」、「リスニング 23.2%」、「文法 21.3%」、「解釈 18.5%」の順となっている。「スピーキング」、「英作文」という発信に関わる分野が弱いことがはっきりと表われている。特に、本県の場合、スピーキング が 弱いと考える先生が8割以上、英作文が弱いと考える先生が7割近くある。

問4　生徒のオーラル・コミュニケーション能力をつけるために活用しているのは次のどれですか？（複数回答可）

1. ＡＬＴ	52件(82.5%)
2. カセットテープ教材	49件(77.8%)
3. ビデオ教材	9件(14.3%)
4. ＬＬ施設	2件(3.2%)
5. ＣＤ－ＲＯＭ教材・パソコンソフトなど	5件(7.9%)
6. 特にしていない	2件(3.2%)
7. その他	5件(7.9%)
(英語の歌	2件
対話練習	2件
対話練習のためのゲーム	1件)

＊全国では、「ＡＬＴ 81.1%」、「カセットテープ教材 65.9%」、「ビデオ教材 28.3%」、「ＬＬ施設 10.4%」、「ＣＤ－ＲＯＭ教材・パソコンソフトなど　7.9%」の順となっている。全国の平均に対して、本県ではビデオ教材の利用の割合が約半分、ＬＬ施設の利用が3分の1以下である。

問5　中学校以前に英語を学んでいる生徒も多いと思われますが、それらの生徒の指導で特に留意されていることがあれば教えてください。

1. そのような生徒はいない	7件(11.1%)
2. 油断しないよう真剣に学習させる	4件(6.3%)
3. 英語を発表する機会を与える	2件(3.2%)
4. 英語弁論大会・暗唱大会に挑戦させる	2件(3.2%)
5. 英語検定を受けさせ自信をもたせる	2件(3.2%)
6. 知識よりも発音に留意させる	1件(1.6%)
7. 知っている単語や表現を引き出してやる	1件(1.6%)
8. その生徒の能力を時には利用する	1件(1.6%)
9. その生徒の発音能力などを無駄にしない	1件(1.6%)
10. 会話やゲームなどの時に活躍させる	1件(1.6%)
11. 特別視・特別扱いを避ける	1件(1.6%)

＊「そのような生徒はいない」との回答は7件で11.1%に相当する。中学校入学以前に英語を学んでいた生徒の割合ははっきりとは把握できないが、ちなみに全国平均では17.5%となっている。

問５-1　英語の勉強は何歳ぐらいから始めるのが望ましいと思われますか？（　）内に数字をご記入ください。（　）歳

1.	１０歳	２１件(33.3%)	7.	９歳	２件(3.2%)
2.	６歳	７件(11.1%)	8.	１２歳	２件(3.2%)
3.	５歳	６件(9.5%)	9.	１歳	１件(1.6%)
4.	３歳	５件(7.9%)	10.	４歳	１件(1.6%)
5.	７歳	５件(7.9%)	11.	１１歳	１件(1.6%)
6.	１３歳	５件(7.9%)	12.	出来るだけ早く	３件(4.8%)

＊全国では、１０歳［33.9%］、６歳［11.4%］、３歳［ 8.7%］、５歳［ 7.6%］、１２歳［ 7.6%］、７歳［ 6.1%］、８歳［ 3.5%］、１３歳［ 3.3%］等となっており、早期教育が望ましいとする傾向は本県の場合と共通している。

問６　実用英語を身につけるのに、授業以外で特に役立つと思うものを３つ選んでください。

1.	ホームステイをする	４３件(68.3%)
2.	外国人と文通をする	２６件(41.3%)
3.	街などでネイティヴスピーカーと話す	１８件(28.6%)
4.	市販の英会話のテープを利用する	２２件(34.9%)
5.	海外旅行をする	６件(9.5%)
6.	衛星放送などで海外からの英語番組を視聴する	２８件(44.4%)
7.	英語塾へ行く	４件(6.3%)
8.	ＶＯＡやＢＢＣを聴く	４件(6.3%)
9.	英字新聞を読む	１０件(15.9%)
10.	英語雑誌を購読する	９件(14.3%)
11.	英会話のＣＤ－ＲＯＭを利用する	３件(4.8%)
12.	その他	１０件(15.9%)
	（ラジオやテレビの英語番組を視聴する	６件
	二ケ国語放送で英語を聴く	１件
	英語の必要性を理解する	１件
	海外に興味をもつ	１件
	留学をする	１件）

＊全国では、「ホームステイをする 63.6%」、「外国人と文通をする54.7%」、「街などでネイティヴスピーカーと話す28.1%」、「市販の英会話のテープを利用する20.7%」となっており、本県の傾向も大差ない。しかし、「海外旅行をする」については、全国の17.1%とは差がある。その他の顕著な例は「衛星放送などで海外からの英語番組を視聴する」が全国の13.4%に対し44.4%と大きく差をつけている。

問７　先生ご自身の英語力で自信がある面を上げてください。（複数回答可）

1.	単語・熟語（語い）	８件(12.7%)
2.	文法	２５件(39.7%)
3.	リスニング	１８件(28.6%)
4.	スピーキング	１１件(17.5%)
5.	読解	２４件(38.1%)
6.	英作文	８件(12.7%)
7.	その他	３件(4.8%)
	（発音	１件

英語圏内の文化等　2件）

＊文法、読解に自信があり、単語・熟語（語い）、英作文に自信がなく、リスニング、スピーキングがその中間という傾向が見られる。

問8　先生ご自身の英語力で自信がない面を上げてください。（複数回答可）

1. 単語・熟語（語い）　23件(36.5%)
2. 文法　6件(9.5%)
3. リスニング　27件(42.9%)
4. スピーキング　42件(66.7%)
5. 読解　8件(12.7%)
6. 英作文　14件(22.2%)
7. その他　3件(4.8%)
   （発音　1件
   全部　1件
   政治経済など時事問題についての聞き取りや議論　1件）

＊スピーキングとリスニングが高いパーセンテージで1、2位を占めている。単語・熟語（語い）、英作文と比較的高い比率で続いている。

問9　先生ご自身が英語力を磨くために実行していることは何ですか？（複数回答可）

1. 映画・英語放送・英字新聞などで英語にふれる　44件(69.8%)
2. 英語教育の本・雑誌を読む　26件(41.3%)
3. ネイティヴスピーカーの友人を持つ　22件(34.9%)
4. 英語で小説などを読む　9件(14.3%)
5. 海外旅行をする　15件(23.8%)
6. 海外研修に参加する　6件(9.5%)
7. 仲間と勉強会を定期的に行っている　6件(9.5%)
8. 短期留学をする　0件(0.0%)
9. その他　8件(12.7%)
   （英会話スクールに通う　3件
   ラジオの英語番組を聴く　2件
   英検を定期的に受ける　1件
   海外通信をする　1件
   英語をコツコツ覚える　1件）

＊約7割の先生がいわゆる生きた英語にふれるよう心掛け、4割強が活字を通して英語教育の研修をし、約3割5分がネイティヴスピーカーの友人を持って聞き・話す英語をブラッシュアップしていることが伺われる。英語で小説などを読むのは案外少なく、海外旅行に大きく差をつけられている。

問10　生徒の「英語で表現する能力」を養うために、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. Classroom English の活用　7件(11.1%)
2. （1分間）スピーチ　4件(6.3%)
3. 身近な題材を用いての発表　4件(6.3%)
4. スキットの作成（と練習）　4件(6.3%)
5. 基本文の暗記　4件(6.3%)

6. 英作文で自己表現　3件(4.8%)
7. (文法的な) 間違いを気にしない　3件(4.8%)
8. ゲーム　3件(4.8%)
9. 場面に応じての表現　2件(3.2%)
10. 英語の歌の活用　2件(3.2%)
11. ＡＬＴの活用　2件(3.2%)
12. 英語で手紙を書かせる　2件(3.2%)
13. 自己表現の英作文　2件(3.2%)
14. ペアでの対話練習　2件(3.2%)
15. テレビ・ビデオの英語番組の活用　2件(3.2%)
16. レシテーション　2件(3.2%)
17. ビデオの活用　1件(1.6%)
18. ＬＬ教室の活用　1件(1.6%)
19. 始業時のミニ英会話　1件(1.6%)
20. 基本文型の暗唱と応用練習　1件(1.6%)
21. 英語で簡単なメモを書かせる　1件(1.6%)
22. 宅習として英文日記を書かせる　1件(1.6%)
23. 学校全体の取組 (English Day)　1件(1.6%)
24. 絵を見て言えることを英語で言わせる　1件(1.6%)
25. 絵を使って自由英作文をさせる　1件(1.6%)
26. 英和辞書の活用　1件(1.6%)
27. 語いを増やす　1件(1.6%)
28. 聴く力をつける　1件(1.6%)

＊これと言った決め手はないようで、現場の先生一人一人が苦労しながら、時と場合に応じて創意工夫されている様子が偲ばれる。

問１１　生徒の「英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育てるために、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. ＡＬＴの活用　１８件(28.6%)
   (ＡＬＴに話しかけさせ通じる喜びを実感させる　１５件
   ＡＬＴの訪問日をEnglish Day と定めている　２件
   ＡＬＴの授業ではできる限り「通訳」とならぬ　１件)
2. ゲームの活用　１４件(22.2%)
   (ゲーム　１０件
   Interview game　４件)
3. 小さい間違いを気にせず・直さない　6件(9.5%)
4. 雰囲気・場面の設定　5件(7.9%)
5. ペア・ワークの活用　5件(7.9%)
6. Classroom English の活用　4件(6.3%)
7. グループ・ワークの活用　2件(3.2%)
8. 既習単語の活用　2件(3.2%)
9. とにかく発言させる　2件(3.2%)
10. コミュニケーションをとれた喜びを実感させる　2件(3.2%)
11. ダイアログのロール・プレイイング　2件(3.2%)
12. スピーチ　1件(1.6%)

13. レシテーション　1件(1.6%)
14. ショート・スキットの活用　1件(1.6%)
15. 英語の歌の活用　1件(1.6%)
16. ヒアリングのテスト　1件(1.6%)
17. 英会話のテスト　1件(1.6%)
18. 小さなことでも褒める　1件(1.6%)
19. 身近なものを使って自己表現をさせる　1件(1.6%)
20. 自己表現を選択肢をもうけてまとめさせ、発表させる　1件(1.6%)
21. key sentenceを含んだスキットをペアで作り対話させる　1件(1.6%)

＊「ＡＬＴの活用 28.6%」と「ゲームの活用 22.2%」が群を抜いて１、２位を占めている。ＡＬＴの活用では、実効より「話しかけさせ通じる喜びを実感させる」という心理面での教育効果に狙いが置かれていることが伺われる。

問１２　コミュニケーション能力の養成で、「聞くこと」の重要性が改めて認識されています。実際のリスニングの指導においては、1) Pre-listening activity, 2) While-listening activity, 3) Post-listening activity の各段階での適切な指導が必要だと思われますが、このことについて、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. 1) について　何にポイントを置いて聴くかを示す
   2) 〃　新出語句（の意味）をフラッシュカードで示し、絵を掲示する
   3) 〃　内容理解についてのＴ－Ｆテスト（４問）をし、70%未満は補説する
2. 1) 絵や簡単な英語又は日本語の説明で場面の設定を具体的に示す
   2) ポイントについての簡単な絵や５Ｗ１Ｈについてメモを取らせ、それをチェックする
   3) 各ポイントについて解説する際、生徒のイメージ・ピクチャーを聞き出しながら生徒のそれぞれのレベルに合わせて評価し励ます
3. ＡＬＴ来校のおり、５～８分使って、ＡＬＴの週末における体験談をしてもらう。
   １ページ程度の原稿を通して読んでもらってから１文ずつ２度言ってもらう。
4. 授業の前にその部分のビデオを見せ、リスニングの後でピクチャー・チャートで内容の確認をする
5. その他
   1. テープの活用　5件(7.9%)
   2. ＡＬＴの活用　4件(6.3%)
   3. Ｑ＆Ａの活用　4件(6.3%)
   4. 場面設定を明確にするための視聴覚機器の活用　4件(6.3%)
   5. ピクチャー・チャートの活用　3件(4.8%)
   6. ＣＤリピーターの活用　1件(1.6%)
   7. ジェスチャーや表情を読み取る練習　1件(1.6%)
   8. リスニングのテスト　1件(1.6%)
   9. 教科書を閉じさせ繰り返し聞かせ後でチェックする　1件(1.6%)
   10. 既習単語を手がかりに内容を連想させる　1件(1.6%)

＊教科書に準拠した音声テープを流すだけに終わりがちであるが、かなりきめ細かい指導が行われていることが分かる。

問１３　教室での「聞くこと」の言語活動をコミュニケーションに結びつけるために、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. 聞き取った内容についての英問英答　7件(11.1%)
2. Classroom English の活用　7件(11.1%)

3. ＡＬＴの活用　6件(9.5%)
4. Ｔ－Ｆ question　4件(6.3%)
5. Dictation　3件(4.8%)
6. ビデオテープの活用　2件(3.2%)
7. テープレコーダの活用　2件(3.2%)
8. ゲーム　2件(3.2%)
9. リスニング・テスト　2件(3.2%)
10. Interview game　1件(1.6%)
11. Body language に結び付ける　1件(1.6%)
12. 聞いたことを動作で表わす　1件(1.6%)
13. 身近な話題を選ぶ　1件(1.6%)
14. 英語の歌の活用　1件(1.6%)
15. short answer のみでなくlong answerを多く用いることで、質問の文を繰り返す努力をさせる　1件(1.6%)
16. 全部聞く（聞き取る）のではなく、部分的にでも聞き取れたら、推量するという方法をとるようにさせる　1件(1.6%)

＊非常に難しい問題であり、特別の妙案もない中で苦労と工夫を重ねられているようである。

問１４　「話すこと」のコミュニケーション能力の養成で、いろいろ工夫をされていると思いますが、教科書の対話文を扱う場合についてお尋ねします。教科書の余剰（redundancy）のない、いわゆるスケルトン・ダイアログの暗記で終わるのでなく、生徒に自由に文を考えて補わせるプラスワン・ダイアログに導き、最終的には、内容的自由を増したオリジナル・ダイアログを創り上げるのが理想だと思われます。このことについて、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. 友人や自分にあてはめて状況・場面を再現させる　9件(14.3%)
2. グループ（又はペア）でスキットを作らせ発表させる　3件(4.8%)
3. 本文のようなスキットを示し、ブランクを作り、ペアで英文を考えさせ、会話形式で発表させる　1件(1.6%)
4. (それぞれの課の終りに"What am I?"などの英作文をしそれを発表させて)ゲームをする　2件(3.2%)
5. Simplified dialogue with some blanks を使うことが多い。これは空所の中に自分の立場で語や句を入れるもので、その単元のKey Sentence を使って教師があらかじめ準備して与えるもの。残念ながらOriginal(生徒の)までは高まっていない。　1件(1.6%)
6. ストーリーの後編や前編をつくる　1件(1.6%)

＊やはり理想を実現するのは大変だということであろうか。

問１５　教室での「話すこと」の言語活動をコミュニケーションに結びつけるために、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. ＡＬＴとの授業でスピーキングの時間を多くとる　9件(14.3%)
2. Classroom English を多用し英語で応答させる　5件(7.9%)
3. Ｑ＆Ａの多用　5件(7.9%)
4. ペア（又はグループ）ワーク　5件(7.9%)
5. 話せる雰囲気作り　3件(4.8%)
6. 間違いを気にさせない　3件(4.8%)

7. (インタヴュー) ゲーム　3件(4.8%)
8. 天候やHow are you?などの答えを定型でなく自由に言わせる　1件(1.6%)
9. so-soなど、教科書に出てこない会話表現等も指導し会話の幅を広げさせる。　1件(1.6%)
10. Q&AにおいてYes. No.で答えた後出来るだけ説明の文を入れさせる　1件(1.6%)
11. 大きな声で話させる　1件(1.6%)
12. 少しの間違いは直さない　1件(1.6%)
13. 自分の生活等について表現させる　1件(1.6%)
14. スピーチ　1件(1.6%)
15. フリー・トーキング　1件(1.6%)
16. 授業以外でもどんどん話しかけ考えさせ使わせる　1件(1.6%)
17. ALT訪問時に備えて指導する際、学んだことの中から実際に使えるもの、活用できるものを取り上げ(宅習として和英辞典等で調べてくる者も多い)、できるだけスムーズにコミュニケーションができるよう全員で口慣らしをしている　1件(1.6%)

＊「話すこと」となると、やはり、ALTの出番が多くなるようである。

問16　「リーディング」は単なる受動的な作業ではなく、書き手の意図に迫るための「予測－検証」という能動的で主体的な問題解決のプロセスだと考えられています。このことについて、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. 読み取りの視点を定めskimming させる　3件(4.8%)
2. 誰が、どうした、何を、の順で先にくるものを予想して読ませる　3件(4.8%)
3. リーディング後のQ&Aテスト　2件(3.2%)
4. リーディング後のT－Fテスト　2件(3.2%)
5. 細部にこだわらず、英文をまとまりとしてとらえる　1件(1.6%)
6. 背景となっている文化についての情報を適宜与える　1件(1.6%)
7. 著者が最も伝えたい部分の確認　1件(1.6%)
8. 感情移入、ジェスチャーによるリーディング　1件(1.6%)
9. 内容をまとめる習慣をつける　1件(1.6%)
10. 5W1Hに気をつけながら読ませる　1件(1.6%)
11. 生徒が読みたくなるような教材の提示　1件(1.6%)
12. 代名詞が何を指しているかを考えながら読ませる　1件(1.6%)
13. 内容に合った絵を選んだり並べ変えたりする活動　1件(1.6%)
14. 分からない部分は想像で大意をつかませる　1件(1.6%)
15. リーディングマラソンの実施　1件(1.6%)
16. 単なる訳にならぬよう前後のつながりを考えさせ、読み取ったことについて感想や考えを述べさせる　1件(1.6%)
17. 4～5枚のピクチャーチャートをばらばらに黒板にはり、正しい順序になるよう本文を読んで考えさせる　1件(1.6%)
18. Let's Read などの長文等では速読させた後、ページや段落ごとを1文程度の短い日本文に要約させ、その後より深い読みにつなげるようにしている　1件(1.6%)
19. 場面を設定させたり、そのためのヒントを与えたり、書き手の立場や感情をくみ取りながら読んだり発表させたりするが、普段はそのような意識や意図で位置づけることはない　1件(1.6%)

＊当然ながら、これと言った決め手はないようで、いろいろ工夫がなされている。特に、16、17、18、19の回答にあるようなきめ細かい指導を継続的に受けると知らぬ間にしっかりした読解力がつく

と思われる。

問１７　教室での「読むこと」の言語活動をコミュニケーションに結びつけるために、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. (起立して)(恥ずかしがらず) 声を出して読ませる　6件(9.5%)
2. 読後の内容理解チェックのための（口頭による）Ｑ＆Ａ　2件(3.2%)
3. ペアでの読み　2件(3.2%)
4. 気持ちを込めて読ませる　1件(1.6%)
5. ＡＬＴやテープを活用してネイティヴの読むスピードで読ませる　1件(1.6%)
6. グループで読解し、全体で確認させる　1件(1.6%)
7. リーディングマラソンの実施　1件(1.6%)
8. ロールプレイイング　1件(1.6%)
9. 地域民話の資料化と授業への導入　1件(1.6%)
10. 役立つ表現の暗記　1件(1.6%)
11. 読めない単語について質問させる　1件(1.6%)
12. 要点を読み取らせる　1件(1.6%)
13. 読んだ内容を発表させる　1件(1.6%)
14. 読解した内容を簡単な絵にしてみる　1件(1.6%)
15. 「書くこと」にむすびつけ要旨をまとめる　1件(1.6%)
16. 伝言ゲーム（５～６人を１グループとし、教科書の文を３～４行暗記して次の人に伝言していき、最後の人が正確な列を winner とするもの)　1件(1.6%)

＊やはり、中学校の段階では、「読むこと」とは「音読」であるのは止むを得ないことであろうか。

問１８　「書くこと」の指導では、コミュニケーションの手段として、即ち、読み手を意識して、自分の考えなどを創造的に表現させることが求められています。このことについて、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. 自己表現とか町の紹介などを自由に書かせ評価する　5件(7.9%)
2. 英語を使っての文通　4件(6.3%)
3. 文法的間違いにこだわらず書かせる　2件(3.2%)
4. 場面をとらえやすくするため、イラスト（絵）を用意させる　1件(1.6%)
5. 新しい文型を学習したらそれを使って自己表現させる　1件(1.6%)
6. 班で自由作文をし代表者が黒板に書く　1件(1.6%)
7. ５文型を意識して書かせる　1件(1.6%)
8. 文法事項を取り入れただけの作文指導を減らす　1件(1.6%)
9. 絵日記を書かせる　1件(1.6%)
10. 辞書を教室に置き自由作文の環境と時間を提供する　1件(1.6%)
11. まず口頭で表現させてから書かせる　1件(1.6%)
12. スピーチの原稿を書かせクラスの前で発表させる　1件(1.6%)
13. 毎日、全生徒がノートに１～２ページ英語学習したものを提出しているがその中の英作文についてチェックしている　1件(1.6%)
14. 教科書の本文を読んで興味・関心のあるテーマを決めさせ、それについてまとまった文を書かせ発表させる。文を書く際、必要に応じ調査活動を取り入れている。例えば３年生の教科書でオーストラリアについて学習した後でオーストラリアについて更に知りたいことを調べさせ、英文にして発表させる（グループ学習）。その後社会科の先生に補足・助言・賞賛をいただく。

この活動は生徒の積極性を育てるのにかなり効果的　1件(1.6%)

15. One minute speech を自分で書かせる。1回程度だと自己紹介や家族の紹介に終始するが、何回も回ってくるうちに絵を準備したりして話をするようになってきた。事前に原稿をチェックするが、できるだけ訂正は少なくするように心掛けている　1件(1.6%)
16. 特に目的意識をもって書く活動（自己紹介、日記、将来の夢etc.)以外では創造的な内容が少ないようで反省している　1件(1.6%)

＊1. 自己表現とか町の紹介などを自由に書かせ評価するとか、2. 英語を使っての文通のように積極的なライティング指導が行われているのはすばらしいと思う。13、14、15のような精力的な指導がなされ、その上で、16のような反省がなされていることに敬意を表したい。

問１９　教室での「書くこと」の言語活動をコミュニケーションに結びつけるために、先生が特に心掛け、効果をあげておられることがあれば教えてください。

1. 日記を書かせる　2件(3.2%)
2. 手紙を書かせる　1件(1.6%)
3. チャートなどを見せ、すぐ英文を書かせる　1件(1.6%)
4. 目標文ごとに、身近な内容や人物のことを表現させる　1件(1.6%)
5. 友人との表現活動　1件(1.6%)
6. ４コマ漫画などのセリフ入れ　1件(1.6%)
7. 自由英作文　1件(1.6%)
8. 場面設定による英作文　1件(1.6%)
9. プリント指導　1件(1.6%)
10. 間違いを大目に見、認め、褒める　1件(1.6%)
11. クイズを作らせ、やらせる　1件(1.6%)
12. 自己表現の手段として、一文を二文に、二文を三文に広げさせる　1件(1.6%)
13. 自作の英文を黒板に書き、自分の目で見、他人の目で見てもらう　1件(1.6%)
14. 生徒が書いた英文を各自で発表し合い、他の生徒はリスニングのみで理解させることとし、お互いに鑑賞させ合っている　1件(1.6%)
15. 全員の前で発表したり、質問を受けたり、書きたいことを書いて伝達し合うという高度な言語活動は実際には学期に数回しかできない。持続的指導として効果を上げているとは言えない　1件(1.6%)

＊いろいろ苦労をして実践され、効果をあげておられることが分かる。

(注) 各問の後に＊印を付して簡単なコメントを付けました。なお問１から問６までのコメントの中で言及した全国レベルのデーターは、日本英語検定協会が平成６年１２月に実施したアンケート調査の集計資料『中学校、高等学校英語科先生５,４３６人に聞く――今、英語教育は――その実態と評価』中で、中学校の先生３,２６８名についての資料に基づくものです。

＜資料１＞

英語科主任殿

拝啓

秋の深まりとともに学校の諸行事も重なり、お忙しい毎日をお過ごしのことと拝察申し上げます。

さて早速ですが、私どもでは、英語教育改善・充実のための調査・研究の一環として、先ず、宮崎県下の中学校で英語を担当されている先生方の実態・意識・実践を調査することになりました。調査結果は纏めて各中学校（英語科主任宛）に報告して参考にしていただき、併せてこれからの英語教育に役立たせる

資料と致したく存じます。

つきましては、ご多忙中誠に恐縮ですが、同封のアンケート（５枚綴）を御校の英語担当の先生方にご配布いただき、また、重ねてお手数をおかけし申し訳ありませんが、回答済のアンケートをご回収の上、同封の封筒でご返送賜わりたくお願い申し上げます。

なお、勝手ながら、１１月末日までにご返送いただけると幸甚に存じます。

敬具

平成７年１０月２日

宮崎公立大学　ＬＬ教室

＜資料２＞

英語担当の先生へ

日夜ご研鑽を積まれ、英語教育にご献身のこと、心より敬意を表します。

さて、早速ですが、私どもは、この度、宮崎県下の中学校の英語担当の先生を対象に、英語教育に関する意識・実態調査をし、併せて「英語で表現する能力」と「英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成に、どのような実践をされているかを教えていただきたく、別紙（５枚）のアンケートを作成しました。

いずれ、同様の調査を高等学校レベルでも行い、中学校と高等学校での教育に基づいた大学の英語教育の実践にも役だたせ、ひいては、中・高・大と一貫した理想的な英語教育の改善と向上に資するべく活用させていただく所存です。

ご多用中、誠に恐縮ですが、上記の趣旨をご理解いただき、ご回答くださいますよう、お願い申し上げます。なお、集計の結果及び他の先生方にも参考になると思われる実践につきましては、できるだけ詳しく纏めて、各中学校（英語科主任宛）に送付させていただきます。

ご回答は、集計・纏めの関係上、１１月２０日頃までに英語科主任の先生にお渡しくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

平成７年１０月２日

宮崎公立大学　ＬＬ教室

＜資料３＞

各中学校英語科主任殿

アンケートの集計結果について（報告）

拝啓　早春の候、先生方におかれましては、益々ご壮健で教育にご専念のこととお慶び申し上げます。

さて、昨年の１１月に実施したアンケート調査では、格別のご配慮を戴き厚くお礼申し上げます。別紙の通り集計結果が出ましたのでご送付申し上げます。

年末の学期末にもかかわらずご協力いただき、貴重な実践記録をご披露いただいた諸先生に深謝申し上げます。

以上、お礼かたがたご報告まで。

敬具

平成８年２月２２日

宮崎公立大学　ＬＬ教室